「三中校長脳卒中で倒れちゃった①」

　校長の荒木規夫です。昨年はコロナウィルス感染症拡大防止対応に追われた１年でした。新年になっても、関東では再度緊急事態宣言が発令され、続いて 13 日には大阪にも。中３生の受験等も近づく中、コロナ対応も、これからが正念場だと感じています。マスク着用などの対策を、引き続きご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

【意外に冷静だったその瞬間から転院まで】

　さて、そんなコロナ禍が収束に向かうのかなあと感じていた(実際は 10 月からまた増えてきてしまうのですが)昨年７月 23 日（海の日）の午後、私は、貝塚市立第五中学校体育館の教官室にいました。ようやく学校が再開されたけれど、夏休みが短くなったため開催が危ぶまれていた、各クラブの中学校３年生の引退となる最後の公式戦も、何とか実施する方向になりつつありました。そんな折、女子バスケットボール部の顧問から、「練習試合をするから、会場に来て、３年生最後の泉南大会に向けて、何かアドバイスをもらえないか」と相談を受けました。私は、経験しているスポーツは、中学時代のサッカーと、高校時代の硬式テニスだけでしたが、平成６年に初任者として貝塚に赴任した時以来、ずっとクラブ顧問としてバスケットボールを指導してきましたので、それは嬉しい相談でした。「喜んで」見に行きました。

　暑い日でした。クーラーのない五中の体育教官室で、時間になるのを、三中と五中の顧問と共に待っていました。開始時間の午後１時になり、「さあ、やろか！」審判をするために笛を首から下げ、私は立ち上がろうとしました。立てませんでした。「あれ？」左足が痺れています。「あれれ？」左手も痺れてきました。左手をグーパーしてみます。痺れつつ何とか動きますがだんだん動かなくなっていくようです。『もしかしたらこの動く感触を味わえるのもこれが最後なのかも』そんなことを考えたことを憶えています。

　一足先に教官室から出ようとしていた五中の顧問に話しかけます。「ごめん、どうやら、脳梗塞発症したわ。悪いけど救急車呼んで。」今から考えても、私はある程度冷静でした。実は 14 年前、私の父は、67 歳の時に脳梗塞で倒れ、命は助かりましたが、右半身不随になりました。また 50 年前、父の両親である祖父母も、それぞれ 60 歳と 61 歳で脳梗塞を発症し、2 人ともそのまま亡くなっています。いわゆる脳梗塞になりやすい家系であることは間違いないので、ある程度は、覚悟をしていました。こんなに早いとは思いませんでしたが（笑）　右手が麻痺した時のために、色々なことを左手でできるように練習したりもしていました。無駄になりましたが（笑）

　私が冷静だったのには、覚悟をしていた以外に、もう一つ理由があります。現在脳梗塞は発症から４時間半以内に、血栓を溶かす薬を投与することができれば、ほぼ後遺症なく治る可能性があります。しかし４時間半を過ぎるとこの薬は逆に危険になるので投与できなくなるそうです。父は発症時、実家の２階で夜寝ていて、11 時頃に自分で異変に気づいて起き、不自由な体で１階にいた家族に知らせようとして転がるように降りてきたそうです。しゃべることもままならなかったこともあり発症時間が確定できませんでした。結局、父には血栓を溶かす薬を投与することができず、大きな麻痺が残り、悔しい思いをしました。その知識があったので、私は救急車がきてくれた時、「発症時間は１３時１分ごろです」と救急隊員に伝えました。比較的冷静だったのも麻痺が残らずすむかもしれないという期待もあったからです。

　練習試合は続けてもらい、救急車には、たまたま学校に来ていた旧知の五中校長に同乗してもらい、岸和田市民病院に運ばれました。すぐにＭＲＩなどをとりましたが、血栓を溶かす薬を入れてくれてないように思い、不安に感じ、医者に確認すると、「あなたは脳梗塞じゃなくて脳出血ですよ」という衝撃の事実を知らされました。

　五中校長が実家に知らせてくれたので、病院に、私の両親と妹が、駆けつけてくれました。これは後から知ったことですが、そこで、医者から次のように言われたそうです。「出血の場所がよくない。このまま出血が続けば、良くても言語障害も残る。悪ければこん睡状態となり、目が覚めなくなる。体は元気なので、治療すれば、そのまま 30 年生きるだろう。治療するかどうか、決めて下さい。」心の準備ができていなかった家族はパニックになったそうです。

　幸いにも、以後はあまり出血せず、左半身の麻痺以外の症状悪化は、2 週間起こりませんでした。急性期を脱したということで、8 月 7 日に、リハビリ病院に転院することになりました。

【不定期コラム№3】へつづく